

## 芥川龍之介「秋」論

——「幸福」は〈松〉とともにあらず

—

芥川龍之介の「秋」(『中央公論』、大正9・4)は、同時代評にて「秋」で一転向を見せようとした<sup>1)</sup>との指摘があるように、作風の変化を窺わせる現代小説として注目を集めた。他の同時代評には「同氏の素直な方面の特徴を遺憾なく發揮した名篇<sup>2)</sup>」とあり、総じて好意的に迎えられたようであるが、内容に言及したものとすると、上司小剣が「如何にも秋の色の鮮かに現はれた作である。かういふ風に、一種特別の機で自然を人間の上に織込んだ作は、近頃の作家に一寸珍しい。姉と妹とが男のことで互に気持ちを探り合ふ姿も、澄み切つた秋の水に影をおとして、寂しく映つてゐる<sup>3)</sup>」と記したほか、やや注文を付ける形で秀しげ子が「評判はよかつたやうでしたが、あゝ云ふ材料をあゝもすらくと片づけてしまはずにもつと信子や照子の心理状態を深刻に解剖して知識階級にある現代婦人の人生に対する人生苦を如実に描写してほしい<sup>4)</sup>」とした程度で、さほど多くはない。

本作については、すでに膨大な数の作品論が発表されており、

鷲 崎 秀 一

軽々にあらずしを記すことはできないが、研究史に触れる前に、話の概要だけは確認しておく必要がある。

信子と照子の姉妹は、ともに俊吉という作家志望の従兄に好意をもっていたが、姉の信子は女子大学を卒業すると、高商出身の青年と結婚し、大阪の郊外へと移住してしまう。閑静な松林が視界に入る家で、当初は幸せに暮らしていた信子であったが、やがて結婚生活は冷え込み、一方で、照子は俊吉と結婚する。一年後の秋、上京する機会をえた信子は、妹夫婦の家を訪れる。その後の展開を、関口安義は次のようにまとめる。

俊吉は煮えきらず、照子は激しい嫉妬の念をもって自分に対するのに気づかされるのである。信子は寂しい諦めの気持ちを抱いて妹夫婦の家を出る。途中必ず待つているようにと言つて朝食後家を出た俊吉の姿を、幌車から見かけても信子は声をかけなかった。信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じていた。<sup>5)</sup>

先行研究では、まず芥川文学の中で「秋」をどのように位置づけるのかという問題から検討が始まった。当初は、得意とした歴史

小説に行き詰った芥川が、現代小説へと舵を切った作品として捉えられ、その内容については、たとえば、竹内眞は「信子といふ女主人公が、妹の情人を譲つて、犠牲的な結婚をし、次第に平静な心持になる女らしい心持が描かれてゐる」と読んでゐる。戦後になると、「寂しい諦め」をテーマとみた和田繁二郎が、夏目漱石「それから」との類縁関係を指摘して、近代文学史上での位相を視野に入れるようになる一方で、本文を丁寧に読み解こうとする作品論も増え始める。その代表的な論文と認められているのが、「実は仔細に読めば、作者はそれを確たる事実としてはいちども断言していない」ことを指摘し、主人公信子を悲劇のヒロインと見る風潮を鮮やかに覆してみせた三好行雄の論考であり、以降は、この三好論を軸に、作者芥川の現実認識を問う観点や、照子への〈恋ゆずり〉や信子の俊吉への愛情の有無を検証する観点、また信子の人物像を分析して、「信子という女の底の浅さは透けて見える。(略)『秋』はせいぜい器用な風俗小説たるにとどまる」というように、作品の過大評価に修正を迫る見解も述べられるようになった。なお、昭和四十三年発行の葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』に、「秋」の草稿が収録された後は、「定稿「秋」と比較する論文も量産されている。

こうして、昭和から平成初期の「秋」研究を概観すると、総じて丁寧な読みを心がける論が多く、むしろその姿勢は評価されるべきものだが、逆に、テキスト内部での事実関係の点検に集中しすぎてゐる観は否めず、また、参考資料も既出の芥川の書簡や別稿

が繰り返し引用され、閉塞感も窺えた。

必然的に、新たな読みの地平を拓くべく、同時代状況から分析する論も増え始める。その先鞭をつけたのは神田由美子で、作中に描かれる「芸術鑑賞、ウインドウショッピング、新婚サラリーマンの休日、郊外の新家庭と、大正という〈新時代〉を女性的関心から捕えた〈現代〉」に注意が向けられると、西山康一は「この当時の女性雑誌等の言説に典型的に現れ創り上げられた健全な中流家庭の趣味ある芸術的な生活」などと頻繁に叫ばれていた〈物語〉——に自己を同一化してゆく「信子の姿を指摘する。以降はさらに切り口も多様化し、たとえば、信子の夫の造形に着目した野田康文は、「当時の読者にとって、「大阪の或商事会社へ近頃勤務することとなった、高商出身の青年」という条件は、単に経済的な安定をもたらす以上のプラス・イメージを喚起したと思われる」として、信子夫婦の生活レベルから作品を読み解くほか、ジェンダーの観点から分析する論も見られるようになり、これらの問題を系を踏まえた金子佳高は、信子夫婦と俊吉がそれぞれ異なる学歴エリートで、かつ信子の夫が「生活水準が中位の新中間層」であることの意味を重視した論を展開している。

以上が「秋」の先行研究だが、本作は、妹に恋をゆずった信子を、素直に犠牲的精神に満ちた感傷家であったと捉えるか、あるいは語られる内容に疑念を持ち、その実は自意識過剰な夢想家であったと捉えるかで、印象が二分していることがわかる。そして、叙述が意図的に「曖昧」ゆえ、読みどころの組み合わせ(たとえば、

恋ゆずりの有無、信子・照子・俊吉の人格や能力、鶏や玉子の象徴性、など)によつては、多様な読みを可能にする作品であることも明らかにされている。むろん、芥川の技量からして、単なるメロドラマを書き流したとは考えにくく、根強く三好論が支持されるのは頷けよう。

また、作品の構成面をみても、「一」〜四から成る構成は、きわめて緊密で揺るぎない。起承転結の結構<sup>67</sup>であり、かつ、二組の夫婦を東京と大阪という二つの舞台で対比させており、作爲的である。ほかにも、これまで指摘されていないところでは、本文「一」の、妹からの手紙中の言葉「ですからその晩も私には、御姉様の親切な御言葉も、皮肉のやうな気さへ致しました。」は、「四」にて主客が入れ替わる形で再演されており、大小の構成面からも作品を読ませようという意識が看取される。

照子はしかし無邪気らしく、やはり活き々と微笑しながら、「覚えていらつしやい。」と睨む真似をした。それからすぐに又「御姉様だつて幸福の癖に」と、甘へるやうにつけ加へた。その言葉がびしりと信子を打つた。

彼女は心もち眶を上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顔をして、姉と眼を見合せた。(本文「四」より)

かように緻密に設計され、ゆえにその分析も多岐に及んでいる。「秋」であるが、それでもまだ詳らかにされていない問題が残されている。それは、作中、重要な場面でたびたび描かれ、読後の印象

にも強く残る〈松林〉についてである。先に引用した同時代評には「自然を人間の上に織込んだ作」という指摘も見られた。にもかかわらず、本作の〈松林〉については、ことのほか追究されておらず、大きく読解に関わらせるといふ試みもされていない。本稿では、この〈松林〉に注目し、その意味を考察することから「秋」を読み直してみたい。

## 二

まずは、具体的に〈松林〉がどのように描かれているかの確認から始める。「秋」の導入部に当たる「一」は、次の一文をもって、余韻深く結ばれている。

信子はこの重苦しさを避ける為に、大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に当つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に変つて行くのを眺めながら。

その他の〈松林〉が描かれる場面は、以下のとおりである。本文中に満遍なく配置されたことで、否が応でも読者の脳裏に焼き付けられていく。

・信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも、最も閑静な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、——それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈黙を領してゐた。(本

文「一」より)

・しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はほんやり頬杖をついて、炎天の松林の蟬の声に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。(本文「二」より)

・そんな文句を書いてゐる内に、(彼女には何故かわからなかつたが)筆の洩る事も再三あつた。すると彼女は眼を挙げ、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黒く茂つてゐた。(本文「二」より)

・照子はそれが可笑しいと云つて、小供のやうな笑ひ声を立てた。信子はかう云ふ食卓の空気にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにはゐられなかつた。(本文「三」より)

このとおり、(松)は、本作では陰鬱な気分とともに表象されることが多い。一般的には、謡曲『高砂』<sup>18)</sup>に表れるように、めでたさと結び付く印象があるにもかかわらずである。

この(松林)について、先行研究ではどのように分析されているのか。具体的に言及しているものを拾い上げてみると、関口安義が「松林の中にある家は、信子にとって生活そのもの」で「炉辺の幸福」の象徴<sup>19)</sup>としたほか、石谷春樹は「信子の現実の内面であり、描かれている「松林」は、信子の心情に合わせて、着実に変化している」<sup>20)</sup>ことを指摘し、文盛業も「彼女の心理的動揺が(中略)「松林」の現実性の上で「暮方」のような意識として表現された」と述べて

いるように、生活や信子の心象風景を象徴する作中装置の一つという認識である。

だが、本作の特徴である曖昧さは、さまざまな趣向において、多義的な読みを可能にしていたはずである。思えば、「秋」や「鶏」というキーワードも、明らかに掛詞的に機能している。「秋」からは「諦め(または飽き)」が導かれ、先行研究で議論の焦点にもなっている「鶏」も「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から——」というセリフが示唆するように、「取り」の意味に掛けられている。このことから押しひろげて考えると、(松)も単に心象風景を象徴するだけでなく、同音の「待つ」をイメージさせ、それが読解の方向性をも示唆していた可能性はないだろうか。

古歌の中には、「秋」と「松」を同時に詠み込む歌もある。本作の舞台の一つである「大阪の郊外」は、諸々の観点から、当時の読者には、阪神間のどこかの地域を想起させたであろうと見ているが、次の同時代資料<sup>21)</sup>には、その阪神間のほぼ中間に位置する鳴尾が、「秋」と「松」を詠んだ和歌の舞台であつたことが紹介されている。

昔は鳴尾の里と云ひ、著名なる邑里なりきと、謡曲高砂にある「遠く鳴尾の沖すぎて」云々とあるは此所にして、又月の名所なり、西行法師の吟詠に曰く

常よりも秋になる尾の松風は、分けて身にしむ物にぞ有ける  
其他鳴尾浦、鳴尾潟、泊尾沖等古詠少らず

浦さびて哀れ鳴尾の泊かな松風さへて千鳥なくなり(老木集)

秋さむく鳴尾の浦のあま人は波かけ衣打たぬ日もなし（続千載集）

ひいやりと腹も鳴尾の西瓜哉（籬島）

阪神電車は先づ都人士を引かんが為、此名所を利用して（略）真に是れ一区画をなせる好個の田園都市とも称するを得べきか。此地より大阪への電車は朝夕三分毎に発車

これを踏まえて、「秋」の舞台が鳴尾であったとすれば、まことによく仕上げられた作品となるのだが、本作には東京と大阪の、それぞれの「山の手」での生活を比較している節も窺え、鳴尾では、六甲山の南麓エリアからやや外れる懸念がある。そのため鳴尾だとは断じ切れないのだが、いずれにせよ、「秋」の（松林）は、阪神間のいたるところに生い茂る松林を、漠然と示唆していたように感じられるのである。

さて、作品における（松）について話を戻すと、本作は、実際に生い茂っている（松）に、信子の心中を映す鏡のような役割を担わせるだけでなく、そこから派生して、「待つ」という場面への着目を促していたように思えてならない。たとえば、次の二つの場面は、本作において読み外せない場面である。

①時々はしかし沈黙が、二人の間に来る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其処には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に従兄の顔を窺はずには

られなくなつた。が、彼は平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を装つてゐる気色も見えなかつた。（本文「三二」より）

②翌朝俊吉は一張羅の背広を着て、食後匆匆玄関へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓参をするのだとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと帰つて来るから。」——彼は外套をひっかけながら、かう信子に念を押した。が、彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、黙つて微笑したばかりであつた。（本文「四」より）

先の引用部①は、俊吉の仕方によつては、その後の展開さえ変わりうる重要な分岐点である。後の引用部②も、前夜の、密会疑惑を受けての「翌朝」である。信子は、俊吉に言われたとおり、「懶さうな眼」をしながら「待つてゐる」た。だが、その間に、妹とは前夜のことと言ひ争いをしてしまい、結果、妹の家を出て行つてしまう。帰る先は、皮肉にも（松林）の中の家なのである。こうして考えてみると、じつは本作には、（松）の見える風景がもう一か所、それとなく描かれていたことに気づかされる。

殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。（本文「二二」より）

ここには、「舞子」という地名が見える。東京と大阪を除いて、

本作で唯一具体的に記されたのは、なぜかこの「舞子」なのである。舞子といえは、芥川と同年代の森田たまが「白砂青松と小学校の読本で習つて憧憬れてゐた舞子の浜」<sup>(2)</sup>と証言しているように、全国的に知られた松の名勝地であった。とすれば、ここでは単に関西で赴いた遊覧地の例として挙げられていたのではなく、厳しくも、気散じて連れられた旅先にまで、松がつきまといつていたことが暗示されていたのである。かように〈松〉の見える風景が、執拗に描かれていることから考えても、〈松(待つ)〉が、本作の読解に果たす役割は小さくなくろう。

## 三

〈松(待つ)〉を意識して、「秋」を読み直すと以下のようになる。冒頭の「一」では、「女子大学」卒で文壇に打つて出る噂もあった信子について、まず焦点が当てられている。信子は、次のとおり、縁談のために、いったん創作の準備を待たざるをえなかつたとされる。

学校を卒業して見ると、まだ女学校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して来た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雑な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、縁談からきめてかかるべく余儀なくされた。

そして、この縁談のために、「誰の眼に見ても、来るべき彼等の

結婚を予想させる」とまで言われた、従兄の俊吉とは結ばれなかつた。妹からの手紙によって、その背景には信子が恋をゆずつた可能性も仄めかされるが、いづれにせよ、信子は「高商出身の青年と、突然結婚」して、〈松林〉が目に入る「大阪の郊外」へと移住した。生活が落ち着いてくると、創作を始められる環境も整うが、彼女はそれをせず、自分の生きざまを振り返つては、次のような「疑」に苛まれてしまう。

が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれであらうか。さう疑を挟む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい気持ちを拡げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける為、大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちの外の松林へ一面に当つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

ついで、「二」である。まず「結婚後彼は三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた」ことが語られる。その具体例として、休日には舞子などに出かけることもあつたと明かされる一方で、夫が留守の平日については言及がなく、それゆえ、夫の帰りを待つだけの日々であつたことを読ませている。やがて「長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した」彼女は、ここでようやく執筆を試みるも、筆は進まない。

夫はその話を聞くと、「愈女流作家になるかね。」と云つて、女のやうな口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はほんやり頬杖を

ついで、炎天の松林の蟬の声に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

ただ、このときは「口もとに薄笑ひを見せ」ており、まだ夫にも余裕が感じられる。それが「残暑が初秋へ振り変らうとする時分」になると、夫の態度も露骨に硬化する。平岡敏夫が「(秋)への移行が転機となっていることに注意したい」と指摘しているとおり、夫婦の間にも、秋風が吹くようになる。信子は「十二時過ぎても、まだ夫が会社から帰つて来ない晩」に「今夜は僕が帰らなかつたから、余つ程小説が捗取つたらう。」などと言われ、涙する。かと思えば、「亦翌日になると、自然と仲直りが出来上つてゐた。そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて来た。」というように、不安定な日々を送るようになったとされる。漠然と、季節や時間が過ぎたとせず、「秋が深くなつて来た」と表現しているところに、本作における、暗示的な手法が見て取れる。つまり、「秋」という語に、心境の移ろいを匂わせつつ、物語が進められていくのである。ただし、何に対する「秋」なのか。夫か創作か生活か、あるいはそれらをひっくるめて現実なのか、その点については読み手にゆだねられている。なお、この頃には、文壇での俊吉の活躍が目につくようになり、信子も気持ちを入れ変え、生活に張りが出る様子も描かれている。このあたりの目まぐるしい心境の変化は、さながら秋の空のようでもある。

かように作品も、まさに秋一色に染まりゆくころ、信子のもとに、母からの手紙が届く。

その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる為に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分当方は無人故、式には不本意ながら参りかね候へども……」——そんな文句を書いてゐる内に、(彼女には何故かわからなかつたが)、筆の洩る事も再三あつた。すると彼女は眼を挙げて、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黒く茂つてゐた。

そして、話は「翌年の秋」が描かれる「三」へと移っていく。信子は久しぶりに東京に戻り、妹夫婦の家を訪れることになる。夫は同伴せず、独りでの訪問である。妹夫婦の家も、故意か偶然か、俊吉一人しかいなかった。俊吉自身は「今日来ようとは思はなかつた。」と述べているものの、のちに帰ってくる妻、つまり妹の照子からは疑惑の目を向けられている。ともかくここで信子と俊吉の二人は水入らずの時間を過ごし、近況報告にも花が咲いているのだが、「時々はしかし沈黙が、二人の間に来る事もあつた。」という。そこに続くのが、先に引用した信子の「かすかに何かを待つ心もち」の場面である。

しかし、待てど「俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破り、何も起きない。信子は、ここでも「何かを待つ」てしまったことで、視界の悪い現状を、より曇らせてしまった。なぜ彼女は待つのか、あるいは、なにが彼女を待たせたのか、本作はその問いを読者に投げかけている。

その後、意味深な「鶏」の話などで盛り上がりつつ、夕食を終え、

その日は泊まることになる。

寝る前に俊吉は、「誰を呼ぶともなく「ちよいと出て御覧。好い月だから。」と声をかけた」。これに応じたのは、妻の照子ではなく信子であった。二人は「十三夜」の月の下、鶏小屋を覗き、静かに言葉を交わす。そして、このときの照子は、「夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めて」待ちかまえている。もちろん心中は穏やかでない。

二人が庭から返つて来ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。青い横ばひがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

翌日の「四」で、俊吉は「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと帰つて来るから。」と言ひ残し、外出してしまふ。残されたのは姉妹だけである。前夜の一件はさておき、照子は姉に話したいことが尽きないようであるが、「信子の心は沈んでゐた」。その理由は、やはり語られないものの、次の場面は、このときの信子の心中を垣間見せている。

「照さんは幸福ね。」——信子は頷を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其処へ忍びこんだ、真面目な羨望の調子だけは、どうする事も出来なかつた。

妹に「真面目な羨望」を隠せないのは、自身の現状、つまり「大阪の郊外」に戻れば、またどこか満たされない日々を送らなければならぬことを思い起こしているのだから。「高商出身の」エリート商社マンの妻として、社会的地位も手にし、おそらく物質

的にも満たされているにもかかわらず、彼女は長きにわたり、「幸福」を感じ取ることができずにいる。そして、次の言葉によって、いよいよ妹と諍つてしまふ。

「御姉様だつて幸福の癖に」と、甘へるやうにつけ加へた。その言葉がぴしりと信子を打つた。

彼女は心もち睨を上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。

ここは先にも指摘したとおり、「一」で記された言葉と対になっている重要な場面である。この瞬間、照子は、姉が「幸福」でないことを悟り、その応答に正体が現れたと見て、「ぢや御姉様は——御姉様は何故昨夜も——」と問ひ質すが、その後については描かれず、真相はやはり不明である。ただ、「寝る前」という時間帯や、「十三夜」が明るい月であることを考えると、密会ではなく、照子の誤解という可能性も払拭できない。

そして、「彼女は従兄の婦りも待たず」、出たことが示唆される。駅に向かう途中、俊吉とすれ違うも、「彼女は又ためらつた」。そして、本作は次のように終わる。

「秋——」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

なお、同時代の辞書には「待つ」という言葉が、次のとおり解説されている。

一、物事の来たらんことを望み居る。

二、用意しゐて、来たるべき物事を迎ふ。



三、たくはへ置きて後の用とす。

「待つ」には、おもに期待と待機の意味がある。そして、作品「秋」は、見てきたとおり、信子の期待と待機とが幾度となく挿入される形で、物語が進行していた。また、〈松〉についても、心象風景を映す程度の用法にとどまらず、「待つ」を連想させ、その場面への注意を促し、さらに、その是非について考えさせる点で、構成上でも重要な役割を果たしていることが確認された。

〈松林〉の中にある家は、信子のように観念ばかりが先行して、「何かを待つ」ことの多い性格では、おのずと思索が深まる場所である。「秋」は、時代をときめく才媛として華やかに生きることを期待し、また期待されながらも、常日頃から待ち、また待たされたため、幸福を感じ取ることができない女性の姿が描かれた作品であった。時代とのかかわりで付言するなら、先行研究でも指摘されているとおり、書くことによって自己実現を企図した〈新しい女〉の、待たざるをえない現実を、松林に閉じ込める形で、鋭く描き出していたということになるうか。

信子が「寂しい諦め」をもって眺める「冷やかな秋の空」は、「大阪の郊外」の〈松林〉と繋がっている秋の空なのであろう。

#### 付記

「秋」本文の引用は、『中央公論』(大正9・4)に掲載された初出に拠った。また、旧字は新字に改め、ルビ・傍点は省略した。

#### 注

- (1) 久米正雄「続七月の文壇(二)」(『時事新報』、大正9・7・14)
- (2) 須藤鐘一「五月の文壇」(『文章世界』、大正9・6)
- (3) 上司小剣「花見月の文壇(九)」(『読売新聞』、大正9・4・14)。なお、ここでの傍線は引用者によるもので、本稿中の他の傍線もすべて同様である。
- (4) 秀しげ子「根本に触れた描写」(『新潮』、大正9・10)
- (5) 関口安義「秋」の梗概(芥川龍之介全作品事典、平成12・6、勉誠出版)
- (6) 竹内眞「芥川龍之介の研究」(昭和9・2、大同館書店)
- (7) 和田繁二郎「芥川の「秋」について」(『立命館文学』、昭和31・4)
- (8) 三好行雄「芥川龍之介のある終焉 仮構の生の崩壊」(『国文学』、昭和45・11)
- (9) 蒲生芳郎「芥川龍之介「秋」私見―信子の造型をめぐって」(『キリスト教文化研究所研究年報』、平成5・3)
- (10) 菊地弘「芥川龍之介「秋」私見」(『日本文学』、昭和46・2)、佐藤嗣男「方法としての歴史小説」の成熟―「秋」に見る芥川文学の飛翔」(『文学と教育』、昭和48・5)、海老井英次「秋」の象徴性―別稿との比較を中心に」(『文学論叢』、昭和54・12)など。
- (11) 神田由美子「秋」(海老井英次・宮坂覚編『作品論 芥川龍之介』、平成2・12、双文社出版)
- (12) 西山康一「芥川作品の語り出される「場」―「秋」をめぐって」(『芸文研究』、平成10・6)
- (13) 野田康文「芥川龍之介「秋」の創作方法―崩壊する物語と物語の完成」(『福岡大学日本語日本文学』、平成13・12)
- (14) 中村清治「同性愛と異性愛の狭間で―芥川龍之介「秋」試論」(『日本文学研究』、平成12・9)、溝部優実子「秋」論―「書く女」としての信子」(『芥川龍之介研究年誌』、平成22・9)、五島慶一「女に小説は書けるか―芥川龍之介「秋」に於ける女性表象」(『女性・ことば 表象―ジェンダー論の地平』、平成29・9、大阪教育図書)など。
- (15) 金子佳高「正系知識人を特権化する差異化戦略―芥川龍之介「秋」における「インテリ女性」と「新中間層」」(『芸文研究』、令和元・9)
- (16) 浜川勝彦は「中心であるはずの信子すらも、自らの心を「なぜだか分からない」を繰り返す有様であり、さらに彼女を離れた根拠不確か

- な噂という刷毛で、表現の明確な線をほかしてしまふ。要するに「曖昧性」という特徴から成り立っている。」(「秋」を読む―才媛の自縄自縛の悲劇)(『国文学』、平成4・2)とし、山崎甲一は「簡潔で含みの多い、暗示的、象徴的な文体」(「秋」―彼等三人の内面の劇)(『アプローチ 芥川龍之介』、平成4・5、明治書院)としている。
- (17) 関口安義「寂しい諦め―芥川龍之介『秋』の世界―」(『国文学論考』、昭和59・3)
- (18) 『謡曲拾葉抄巻一 高砂』(本居豊顕等校『国文註釈全書 第3編』、大正2・8、皇学書院)には、次のとおりある。
- 松は是常住不変の形をあらはし和漢共に賞之 世阿弥口伝抄云  
高砂は松の日出度威徳を作るものなれば初春に是をうたひ初る也  
云々
- (19) 注17と同じ。
- (20) 石谷春樹「芥川龍之介『秋』試論―記号論的アプローチ」(『皇学館論叢』、平成5・4)
- (21) 文盛業「芥川龍之介の『秋』考―その觀念の空間」(『国学院大学大学院紀要』、平成13・3)
- (22) 別稿「芥川龍之介『秋』考察―(松林)のある「大阪の郊外」について」を参照されたい。
- (23) 大久保高城編著『最近の大阪市(増補訂正三版)』(大正3・8、藤村文治)からの引用である。本書は、当時の前大阪市長植村俊平と前大阪市会議長中橋徳五郎が序を書き、二版は『東京朝日新聞』(大正元・10・19)の書評欄でも「大阪市の市街の発展、政治経済教育警察言論界有らゆる方面について紹介したもの」として取り上げられている。
- (24) 森田たま『ふるさとの味』(昭和31・6、講談社)
- (25) 平岡敏夫『秋』―その意味するもの』(一冊の講座 芥川龍之介』、昭和57・7、有精堂出版)
- (26) 上田万年・松井簡治『大日本国語辞典 第4巻』(大正8・12、金港堂)

(二〇二〇年七月三日掲載決定)